

平成二十三年度読書感想文コンクール作品集

も
さ
く

大分工業高等専門学校
学生図書委員会
図書館運営委員会

目次

講評

入選

第1位

『悪童日記』を読んで

一般科目・国語科教員 相本正吾 …… 1

第2位

『夢をかなえるゾウ』を読んで

電気電子工学科 三年 大塚友香梨 …… 2

第3位

『いまも、ここにいる』を読んで

電気電子工学科 二年 久積新 …… 3

佳作

『少女地獄』を読んで

制御情報工学科 三年 姫野一輝 …… 4

究極の選択と何気ない選択
― 『マルカの長い旅』を読んで

制御情報工学科 二年 長生まゆみ …… 4

心に一本の花を― 『最後の一句』を読んで

機械工学科 二年 安部佑一 …… 5

遅くはない― 『君はなぜ働くか』を読んで

電気電子工学科 二年 矢野紘樹 …… 6

隔たりのない時

機械工学科 三年 阿部勇太 …… 7

― 『妖怪アパートの幽雅な日常』を読んで

制御情報工学科 二年 和井悠一郎 …… 8

『夏の庭』を読んで

制御情報工学科 三年 佐藤諒 …… 8

『砂漠』という本と出会って

都市・環境工学科 二年 麻生更紗 …… 9

編集後記

学生図書委員長
(制御情報工学科 四年) 本田晶子 …… 10

講評

一般科目・国語科教員

相本正吾

本年度も、例年と同じく、担当国語教員により各クラスから選ばれた優秀作及び自主投稿の作品を対象にして、教員図書委員及び学生図書委員による第一次・第二次審査、国語教員による厳正なる第三次審査を経て、「入選作」として三作（第一位と第三位）、「佳作」として七作が決定されました。

第一位の榮譽を得た大塚さんの『悪童日記』を読んで」は、戦時下の混乱の中で人を出し抜くあらゆる悪行も辞さず日々の現実や労働をこなしていくハンガリーの双子の少年たちの生きざまに、賢く強くなくては生き抜いていけなかった当時の厳しい社会状況をまずは読み取っていく大塚さんの地についた受け止め方が光っています。「ぼくら」だった二人がやがて「ぼく」として一人立ちしていく彼らの行く末に人間性の回復を期待しようとする結びも秀逸であり、読みごたえがありました。

第二位を得た久積君の『夢をかなえる象』を読んで」は、枕元に現れた象の神様から与えられる数々の課題を行なっていくサラリーマン

の話を読み、その与えられた課題は難しいものではなくあまり意味の無いぶんもありながら、身につくまで継続していくことや夢を持ち続けることの大切さを久積君は鋭く読み取っています。

第三位を得た姫野君の『いまも、ここにいる』を読んで」は、この本で紹介されている臓器提供の遺言を残していた女の子の日頃の心映えに感心した姫野君は、少しでも他人の力になりたいたいというやさしい態度や行動が自分も出来るかどうか、真摯に自らに問うていて、心打たれるものがありました。作者にならい提供する自身の臓器をキラキラと輝くきれいな宝石と表現したことも強い印象を与えています。

佳作となった七つの作品も、内容や表現において入選作に勝るとも劣らない力作が揃いました。純粹無垢の聖女ながら虚言癖があつて周囲を困惑させている少女の話を読み彼女の隠れた内面を思いやつた長生さんの作品、ユダヤ人狩りに遭つた親子の話を読み厳しい状況において選択するということの重みと責任を考えた安倍君の作品、死刑となる父親の助命を自分の命と引き替えにお上に嘆願した主人公いちの初志貫徹を称えた矢野君の作品、働く人のあるべき姿を語つた渡邊ワタミ社長の言葉から私たちが生きていく上での大事なことを学んだ阿部君の作品、妖怪たちと楽しく交流する主人公たちの様子をを通して隔たりなき共存ということを考えた

和井君の作品、老人の死を見届けるという好奇心から出発しながら共に過ごし交流していくうちに相手のことを大事に思う気持ちが生じた少年たちの話に人との絆や命の大切さを読み取つた佐藤君の作品、お互いのことを理解し合い助け合う四人組の大学生たちの物語を読んで社会のオアシスとしての人間関係というもののありがたさを思つた麻生さんの作品、いずれの作品も、見るべきものがあり、読む私たち側にいろいろと大事なことを考えさせる作品となっています。

古今の名作と呼ばれる古典は、その時代や未来を感じ取る作者の鋭敏な感受性によって時代を超えて普遍的で大事な事柄やテーマを含んでいるのであり、今回入賞した皆さんは作品中のその大事なテーマを鋭く読み取り、かつ、現代社会や自分自身の問題に引きつけて、謙虚に我が身のありようを省み吟味しています。作者から難しい大きなテーマを突きつけられて、これまでの自分の基盤が揺らいでしまい自分の考え方や見方が不安定な状態に陥ってしまうこともあるでしょうが、評論家の小林秀雄が「よい問いを出すことが大事だ。問いそのものが答えだ。」と言っているように、その状態は、より堅固な基盤や真理の獲得に向けて大事な出発点になります。そういう意味で、学生諸君には今後も良書との出会いとその後も続く対話を大事にしてもらいたいと思います。

第1位

『悪童日記』を読んで

電気電子工学科 三年

大塚 友香梨

話の中で、「ぼくら」は双子だ。「ぼくら」は確かに、同じ時間、同じ日に同じお腹の中から産まれてきた。しかし「ぼくら」である以上、「ぼくら」はそれぞれ「ぼく」としての人格があるべきなのだ。しかし、この本の「ぼくら」にはそれが無い。同じことを考え、同じ行動をし、個人としての意思が全くない。双子というのは確かに、性格が似てくると聞いたことがある。が、私が思うに彼らは「双子」ということ自体も超え、まるで二人で一人の人間のように喋る。話を読み進めても、彼ら個人の意思は全く出てこないのだ。しかもそこに不自然さはほんの少しも感じられないのである。

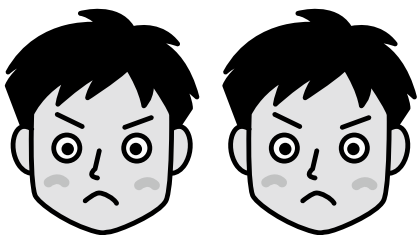
この本は、第二次世界大戦末期から戦後にかけての数年間、ハンガリーの田舎町に疎開してきた「ぼくら」の物語だ。彼らは母親の元を離れ、「魔女」と呼ばれているおばあちゃんの元で暮らし始める。「ぼくら」はとても賢い。おそろしく私よりも小さな男の子たちが、おばあちゃんも、文房具屋も、将校も、刑事さえも出し抜いていく。私が彼らを見ていて抱いたのは恐怖に

よく似た感情だった。彼らは、平気で人を殺す。危ない手榴弾を勝手に持ち帰り、必要なら脅しもかける。彼らはとても冷酷だ。生きる為ならばどんなことでもするだろう。他人の不幸さえも感じない。

しかし、彼らはそれに似合うだけの努力もある。空腹に耐えるため、数日間ご飯を食べなかったり、痛みを耐えるためにお互いを打ったりする。他の国の言葉を覚え、学校に行かずとも勉強をする。この本の中に彼らの愚痴は何も書かれていない。彼らは淡々と、機械のようにそれらをこなしていく。読んでいるうちは、気持ち悪い、怖い、という言葉しか浮かんでこなかった。私よりも小さな子供達がそんな事をやるのだから。だが、読み終わって思ったことは、こうすることでしか彼らは生き残れなかったのではないか、ということだ。本には書かれずとも、彼らはお互い苦しい思いをしただろう。戦火の中を生き残るのは生易しいことではないはずだ。彼らは心が強く、また、本当に頼れる相手がいたからこそ、耐えたのだ。

そのうち、「ぼくら」は持っていた爆弾で迎えに来た母親を殺す。おばあちゃんが死んだ後、息子たちを頼りに帰ってきた父親に嘘をつき、死なす。そしてそれを利用して、二人のうち一人は国境を越え、一人は家に戻る。「ぼくら」はようやく「ぼく」になる。物語はそこで終わっている。だが、彼らの人生にはまだ先がある。

辛いときに傍にいてくれるもう一人の「ぼく」はもう居ない。だが、それで良かったのだ、と私は思う。人間には個人の感情がなくてはならない。寂しいと、辛いと思うことは罪ではない。それこそが、人が生きる意味だと私は思うのだ。彼らはきつと、これから時間をかけてお互いそれを取り戻していくのだろう。「ぼくら」としてではなく、「ぼく」として。



第2位

『夢をかなえるゾウ』を読んで

電気電子工学科 二年

久積 新

主人公はどこにでもいるサラリーマン。彼はこれまでいくども自分自身を変えようとしていたが、三日坊主の性格が災いして失敗し続けてきた。ある夜、彼は泥酔したままインド旅行で買った置き物に「人生を変えたい」と泣き叫ぶと、次の朝、枕元に関西弁を話す謎の生物が。それは置き物から出てきた神様・ガネーシャであった。主人公はガネーシャに振り回されながらも、夢を成すためにガネーシャの課題を行うことになる。

ガネーシャから出題される課題は、それほど難しいものではなく、むしろ「こんなことをして何の意味があるのだろうか?」と思うようなものばかりだ。しかし、その課題を確実にに行い変化していく主人公。そんな話を読んで私が学んだこと、感じたことは大きく三つある。

まず第一に、「実践し、身につくまで継続することが大切である」ということである。自分が変わることに期待しているうちはいいが、時間がたつと「自分は変わらない」という考えになり、それがいつまでも続いていくのが変われ

ない理由だと言っている。

私はテストの点数が悪かったりすると、次こそ毎日勉強していい点をとろうと思うが、結局続かず、同じ事を繰り返している私には、学ぶべき言葉であった。

第二に、「人は夢を持ち続けなければならぬ」ということである。主人公はかつて夢を持っていた。それがいつの間にか日々の生活で流されてしまい夢を忘れてしまっていた。しかし、ガネーシャによって、その夢を思い出し、その夢に向かって努力することを思い出した。

人は夢や目標を持つことによって日々の行動が変わるんだな。ということがわかった。夢は持ち続けなくてはいけないと思った。しかし私は今、具体的な夢を抱いていない。だからこそ、なぜ高専に来たのか、高専に来て何がしたかったのか、ということを考えなければならぬと思った。そして、それを見つけ、そのために毎日何をすべきかということが今後の私の課題である。

最後に、ガネーシャの課題の中に「毎日感謝する」というものがある。蛇口をひねったら当たり前のように水が出て、ボタン一つで部屋が明るくなる——それらは私たちにとって当たり前のことだが、それは昔の人が頑張ったからこそ。だから、みんなのおかげで私は幸せですと感謝する、ということだ。

私はこの本を読んで、たくさんのことを学ぶ

ことができた。この本と出会えたことに感謝したいと思う。



第3位

『さきもつ、ひんごころ』を読んだ

制御情報工学科 二年

姫野 一輝

この本は理恵という一人の女の子の生と死について描かれた本である。

「ドゥーン」

突然鈍い音がした。信号無視の車と理恵が勢いよくぶつかったことを意味した。この交通事故で理恵は脳死状態になってしまった。

だが、僕は理恵はとてむすこいなあと考えた。それは理恵がしっかりと遺言を残していた点にある。その遺言は「臓器提供意思表示カード」というものだった。

このカードは、もし自分が脳死状態になった場合、自分の臓器を、臓器を必要としている人のために提供してもよいという意思を示すカードだ。

正直僕なら絶対このような遺言は残さないだろうと思った。むしろこのカードの場合はなおさらいやだと思った。だから僕は理恵はとてむすこいと思った。

僕には腎臓が悪い弟がいる。普段は元気に過ごしているが、医師にはあまり激しい運動などはなるべく控えるように言われている。もし弟

の腎臓の状態が悪化し兄弟である僕の腎臓を提供しないといけない極面になってしまった場合、僕ならどうするか考えた。正直提供しないかもしれない。確かに弟とは血のつながった大切な人だ。だが正直、僕の腎臓を弟に移植するなんて恐怖でしかない。ましてまったく知らない他人に自分の臓器を提供するなんて僕なら絶対にありえないと思った。そのうえ理恵には感心した。

次に僕はこの表現に感動した。

「理恵の臓器はまるで宝石のように輝いていた。」

という表現だ。

僕も理恵の臓器はきつと宝石のように輝いているのだろうと思った。他人に自分の臓器を提供できるやさしさのある人の臓器が輝いていないわけがないと思ったからだ。

果たして僕の臓器は理恵のように輝いているのだろうか。今は輝いていないだろう。だが理恵のように他人の力になりたいというやさしい心を養っていくことで臓器も自然に宝石のようになると思うので少しでも輝くように努力しようと思う。

そして、もし弟の腎臓が悪くなり僕の腎臓が必要となった時、僕もキラキラ輝くきれいな宝石を弟に提供したい。

佳作

『少女地獄』を読んだ

制御情報工学科 三年

長生 まゆみ

「姫草ユリ子」。彼女はその名の通り可憐で、小鳩の様な純真さを持つ少女だった。その上、仕事の間では天才的な腕前を発揮するので、接する全ての人間に好意を抱かせていた。そんなユリ子の中にあつた、唯一にして最大の陰の部分には「虚言癖」。身を置く先々でその名前から年齢、実家の家柄まで全部を偽る。職場であらゆる人々に根も葉も無い嘘を吐く。一つ嘘を吐けばそれを裏付けするためにもう一つ二つ嘘を重ねなければならず、結果的にむくむくと虚構の世界が膨れあがってしまうのだった。その大嘘吐きが原因で、彼女は以前務めていた場所から半強制的に辞職を求められ、次なる居場所を探して彷徨するうちに白柞病院をみつけた。院長の白柞先生も、彼女を看護婦として雇ったが故に虚構世界へ引きずり込まれていくのだが、あまりにも彼女の普段の様子が清浄無垢なため疑ってみようという気になれない。また、彼女の仕事は十分以上に細やかで、患者に対しては聖女の様に接するものだから、開業して間もない白柞病院にとっては繁栄を招く天使

の様な存在だったのだろうと思う。「そんな良
い娘が嘘なんて吐く筈がない。」という先入観
が、彼女の虚構世界をベールの様に覆い隠して
見えなくしていた。そんな観念を相手に抱かせ
ることも、姫草ユリ子の魔力のなす業わざなのかも
しれない。作品序盤のユリ子の遺書には、「何
も知らない純な少女の言葉は、たとい事実でも
ウソとなっていく」という部分があるが、彼女
はこういった控えめで淑やかな言葉遣いとその
態度で、山程の人にウソを事実として信じ込ま
せていたではないか、と思う。作品の中で驚い
た点は、一度くらいは皆もユリ子の嘘に憤慨し、
暴き出したりもするのだが、最終的には全員が
ユリ子を許していたことだった。確かに、作品
全てを通して考えるとユリ子は、誰かを困らせ
ようと思つて嘘を吐いていたわけでは無く、ど
ちらかというと本人も抑えきれない程肥大化し
た妄想が現実世界にはみ出してしまつていたと
いった感じだった。それにしても姫草ユリ子の
創造した虚構世界はその巨大さ、内容の面で、
全くもつて無為に創られたものとは思えない。
彼女は、普通に生きることに快樂を見い出せな
いものだから、大嘘を吐いて自分だけの世界を
創ろうとしていたのか。決まつて嘘を吐くタイ
ミングが月初めで、それがすなわちユリ子の月
経来潮2、3日前を指していた点から、只のセ
ンチメンタリズムから嘘を吐こうという気が起
きていただけなのか。このようなことを詮索さ

れるのが嫌で、姫草は自ら命を絶つたのか。何
もかもわからないまま、作品は若干不条理な形
で終わってしまう。私の目には、ユリ子は人迷
惑な夢想家としか映らなかつた。でも、臼杵先
生の言う通り、彼女は本当に夢想が無ければ生
きていくことが出来ない程華奢で、愚かなため
につい嘘を吐いてしまう哀れな娘だったのかも
しれない。何故か、私も段々姫草ユリ子を許そ
うとしている。



佳作
究極の選択と何気ない選択
―『マルカの長い旅』を読んで

機械工学科 二年

安部 佑一

「選択」それは人が毎日何気無くしている行
為。しかしそこに自分や家族、他人の命が関わ
る場合、人はそして自分は何を考え何を最優先
してしまうのか。

ナチス時代ポーランドのラウオツネという山
間の村でユダヤ人の女医ハンナ・マイは治療し
た女性から「ユダヤ人狩り」が始まったことを
内々に告げられる。ハンナはすぐに決断し娘の
マルカとミンナを連れて山脈を越えハンガリー
に脱出することにする。しかしその途中で一番
下7歳のマルカが熱を出し動けなくなつてしま
う。このままだとマルカが荷物になりペースが
遅れて自分やミンナの命が危険にさらされる。
かと言つてマルカを置き去りになど……この究
極の選択のなかハンナが選んだものはマルカで
はなく自分ともう一人の娘だった。そして二人
はユダヤ人狩りから逃れられる。しかしハンナ
は自分が安全な状況になるにつれてマルカを置
き去りにしたことを激しく後悔しマルカを探す
ことにする。その間マルカはいろんな人に助け
られたり裏切られたりを繰り返して人を信じられ

くなつていった。そして母と再会の時マルカは母のことを許してはいなかった。

この結果からハンナがマルカを置き去りにしたことについて、それが正しかったのか間違っていたのか分からないけど、自分もハンナと同じ選択をすると思った。ハンナにも医者として今まで積み上げてきたものがあるし、自分の命が一番というのは当り前だと思うからだ。しかしマルカの立ち場で考えるとこの選択は間違っているとも思えるし母を恨むのも仕方無いと思う。つまりその選択が正しいか間違っているか一様には決められない。なぜならそれは立場や状況によつて変わってくるものだからだ。だから本当に大事なものは選択自体よりも、その後どうするかだと思う。この物語は実話でハンナとマルカが再会したところで終わっていてその後どうなったかは分からないが大事なものはこれだからなので娘に対して過ちを償い家族の絆を取り戻してほしいと思う。

自分の人生においても今後、重大な選択を迫られることがあると思う。その時、選択し決断することを恐れずに、その結果を良くするためには動ける人になろうと思う。その選択が重大であつてもハンナの究極の選択に比べると何気無い選択の一つにすぎないのだから。

佳作

心に一本の花を ―『最後の一句』を読んで

電気電子工学科 二年

矢野 紘 樹

僕はこの本を読んで、自分の思いや考えていることを、貫き通せているかを考えました。

主人公いちは、父親が罪人となり、死刑になるということを知り、自分の命と引き換えに父親を助けてもらおうと思います。そして、何度も書き直して願書を書き、奉行所に持って行きました。奉行の取り調べの時、身代りを聞き届けられたら、すぐに殺されるので、父親に会えないと言われても、「お上の事には間違はございませんすまいから。」と言って父親のことを確認し、釘をさします。

まず僕が驚いたのは、いちの自分の身を犠牲にして、父親を救おうとした点です。この時代は、奉行所等の役人は絶対的な権力者です。怒りを買えばすぐに殺されるような時代によくその決心したなと思いました。現代ならば身を犠牲にしてと言っても死ぬことはまず無いので、僕たちの言う「命と引き換えにー。」という言葉とは全く重みが違います。僕がいちの時代で同じような場面に直面したら、こんな献身的な行動ができるか、正直とても自信がありません。

だから、僕と同じ年頃なのに、いちの決断力にはとても尊敬します。

もう一つ、僕が思ったのは、意志の堅さです。いちには、役人の作つた法や権力に対して屈せず自分の思いを伝えようとしています。一度決定した父親の刑罰を自分が代わりに受けようとしてしまふ。そして、身代りになれば父親の命は取らないという約束を守ってもらいたいと思ひ、いちの言つた最後の一句、「お上の事には間違はございませんすまいから。」と言いきります。もし自分だったら、決定したことを変えるのはやっぱり無理だと断念してしまうかもしれません。いちにはそれが出来ていて、僕はいちの心に太い芯が一本通つていると思いました。

今僕は生活をしている中で、どれだけ自分の意志を強く持っているか考えた時、殆ど周りに流されている様に感じました。自分が何を考えて、一番何がしたいのか。それを途中で投げ出して、世間の流れに身を任せて生きていくのではないかと思ひます。いちのように、献身的で初志貫徹な生き方はしてない気がします。

ふと考えると小学生の頃は「僕はこう思う」という考えが心に芯として存在していた様な気がします。今一度自分が何を思ひ、考えて、何をしたいのかを見直すきっかけになりました。

ただ、いちの強い思ひでも権力の前には、「変な小娘だ」としか伝わらなかつたのは、悲しく思ひました。

佳作

遅くはない 『君はなぜ働くか』を読んで

機械工学科 三年

阿部 勇太

まず、この本を読んで思ったことは、人間が持つべきものは、高学歴やお金ではなく「人間性」だということです。

この本は、居酒屋「和民」などを兼ねるワタミ株式会社代表取締役社長・CEOである渡邊美樹さんにより書かれたものです。題名のとおり主にサービスマスの「働く人」のあるべき姿などが書き綴られています。

「はじめに」ということで渡邊社長の説く「ワタミらしさ」が冒頭に書かれています。それは、「誠実に一生懸命生きること」「自分にうそをつかないこと」「自分以外の人の幸せと自分の幸せを重ねること」「日々の戦いの中で、人として成長していくこと」「夢を追いかけること」以上の五つです。これについて思ったことは全て当たり前に出来るべきことではないかという事です。しかし、これは当たり前だと思われがちだけれど難しいことだと思います。まず一つ目の「誠実に一生懸命生きること」この「誠実に」というのも人間は自分の都合のいいようにウソをついたり物事を偽りたくなりま

す。他にも「自分以外の人の幸せを重ねること」これも他人が幸せと思うならば自分はどんな労働も惜しまないといったことなんだと思います。これらを当たり前に出ればとても良い世の中になると思います。これらを実践するのはとても難しいことです。しかし一人一人が意識して取り組むようになればきつと出来るようになります。自分もこれから常に意識してこれらに取り組んでいきたいです。

僕がこの本の中で好きな言葉は、「人生に「遅い」ということはない。」と「思うだけなら誰にでもできる。大切なのは、思いをカタチにすること。」の二つです。僕は今まで何度も遅いからといって物事を諦めてきたし、思ったことも口で言うだけでほとんどカタチに出来ないまま生きてきました。なので、この本に出会って良かったと心の底から思えます。これからは自分に正直に人間性や誠実さを磨いて、自分らしさも失わないようにこれから生きていこうと思います。

渡邊社長はこう言いました。「人間性が六割、生活習慣が二割、学歴などは残りの二割の価値しかない」たしかに、僕もいくら勉強ができれば「人間性」つまり、約束が守られること、嘘をつかないこと、人を傷つけないこと、笑顔で人と接すること。これらが出来なければ、どうなのかとも思います。社会に出て行ったときに十分通用するようであと少しの学校生活を有

意義に過ごして行こうと思わされました。この本を読んでから本気でこれからの生き方を考えさせられました。本当に良かったと心の底から思えます。ということでも今後の目標としては、人間性と誠実さ、常識力を磨いていこうと思います。そして自分らしさも失わないように。今からでも遅くはないでしょう。



佳作

隔たりのない時 ―『妖怪アパートの幽雅な日常』を読んで

制御情報工学科 二年

和井 悠一郎

この物語は、主人公・夕土とその周りを取り巻く人や妖怪たちとの楽しくも、心揺さぶられる幽雅な日常を描いている。

人には必ずと言っていい程の偶然が、日常的にありふれている。僕は、この本を見つけた時、「面白い題名だな」と思うと同時に妖怪について少し考えた。僕にとって妖怪とは現実には存在せず、人の姿をしていない物だ。だが、この本を読み始めて、自分の妖怪に対する印象が変わった。主人公の夕土の周りには、様々な妖怪がいた。人の形をした物、虫や獣の形をした物と様々であり、そのすべてが人間の様に日常で暮らしていた。その中で印象的に思えたのは、妖怪たちが人間らしい生活を過ごしていたことである。人間にとつての日常は妖怪にとつても日常であると感じると共に、どちらもが共通の考えを持っている。作中に出てくる妖怪たちが過ごす日常を見て、「自分たち人間よりも、人間味がある」と思った。人間とは違う存在である妖怪が、どうしてこんなに人間味あふれているのかと疑問に思った時、あることに気づいた。

それは人への憧れではないかと。人の過ごす時間には限りがあり、無限ではない。しかし人は、その時の中で幸せや悲しみ、出会い、別れなど様々な経験をしていく。そこに妖怪たちは惹かれるのだと思う。

そして、僕にとつて印象的なことがもう一つある。それは、主人公を取り巻く人たちの考え方である。作中に出てくる人の中で、一色という詩人がいる。彼は、妖怪を仲間とし、共に過ごすことに幸せを見出し出している。こういうことを考えるのは、彼にとつて人も妖怪も変わらない存在であるということである。人と妖怪を分けるものは、姿だけであると感じた。他にも作中に出てくる人はそれぞれの考えを持ち、日常を過ごしている。楽しいことも悲しいことも共にいるだけで幸せになれると信じて。

読むことで見えてくるものがある。僕はこの本を読み、分かったことがある。それは、人生を長い目で見ることである。人間の中には自分のことを見つけれず、迷い、過ちをする者もいる。でもそれは、人との係わりが少なくなつたためであると思う。自分と違う価値観を知ることでは人は一歩も二歩も進んで行く。そのことを僕は、この本を読むことで感じた。

人には人の、妖怪には妖怪の価値観がある。でもそこには何の隔たりのない場所がある。人もこんな風に、何の隔たりもなく接する時代になればいいと、僕は思う。

佳作

『夏の庭』を読んで

制御情報工学科 三年

佐藤 諒

僕はこの作品を読んで、命とはどういうものかを考えさせられました。誰かが死ぬということがよく理解できない三人の少年たちの気持ちにとつても共感することができたのは、僕にも同じような経験があったからだと思います。

そして、この「死」と向き合うためにこの三人の少年はある老人と過ごすことになりましたが、人の死ぬ瞬間を見たいから老人と過ごすというのが何か単純で、いかにも子供の発想だということがよく表されていると思います。

彼らにとつて老人は赤の他人であり、この時すぐに死んでしまっても少年達は涙も流さなかつたでしょう。多分、僕も同じです。

僕なりの考えでは「人の死」が悲しい理由は、今まで共に過ごしてきた人ともう一生会えなければ、話すこともできないからだと思います。しかし、別に知らない人と会えなくなつたところで悲しいことは何一つありません。少年達も同じ気持ちだったのではないかと思えます。

最初、彼らと老人はとても仲が悪く、少年の一人が

「おまえがどんな死に方するか、オレは絶対見てやるからな！」

と叫ぶほどでしたが、一緒に過ごしているうちに仲も良くなっていきました。

初めの目的は老人の死ぬところを見ることでしたが、交流を深めていってしまうのです。

人間とは不思議なものだと感じさせられま
す。なぜなら、初めはみんなそれぞれ違う目的
を持っていても、いつも近くに
いるだけでどんどんお互いを信頼できるよ
うになるからです。

もうここまでできたら、少年達にとつてこの老人は赤の他人とは言えません。直接は書かれて
いませんが、初めの心の中が「早く死んでほ
しい」であつたとすれば、この時は「一生、死
な
ないでほしい」に変わつていたのではないかと
考えます。

しかし、こんな気持ちはむなしく少年達が部
活の合宿に行つている間に老人は亡くなつてし
まいます。ここで彼らが涙を流したのも今まで
共に過ごしてきた中で「絆」が生まれたからだ
と思ひます。この「絆」が出来た人間が亡くなつ
たとしても、心のつながりのある人の中で永遠
に失われることなく生き続けるのだと思ひまし
た。

佳作

『砂漠』という本と出会つて

都市・環境工学科 二年

麻生 更紗

この本を読むきっかけになつたのは、父の勧め
でした。私は正直、読書があまり好きではな
く、こんな分厚い本読めるか心配でしたが、読
み始めるとスラスラ読むことが出来ました。

この砂漠という本では、様々な個性を持つた
四人組の大学生生活を描いていました。全然違
う性格の四人が共に時間を過ごしていく中で、
お互いのことを理解し、助け合つて問題を解決
し合つていました。今、私にはそんな仲間がい
るだろうか？そしてこれからそんな仲間に出
会えるだろうか？と考えさせられました。私が
通つている大分高専は五年制です。まだ私は一
年半くらいしか通つていませんが、私のことを
全て理解してくれている友達、また私が理解し
ている友達に出会えているかと言われれば、ま
だ出会えていないような気がします。この本を
通し、ありのままの自分を隠すことなくさらけ
出し、そんな真の姿の私を受け入れてくれる友
達を残りの学生生活で見つけていきたいと、こ
の本を読んで思ひました。

書名である「砂漠」は、この本の中で、「社会

のことを意味していました。私たちは学校とい
う小さい社会の中で生きていますが、いつかは、
愚痴や嫌味、諦観や嘆息でまみれているかもし
れない場所で必死にもがき、乗り切り、そして
馴染んでいかなければなりません。社会人にな
ることを望んでいましたが少し怖くなってしま
いました。しかし、砂漠には、乾いた砂だけで
なく、オアシスがある。乾いた喉と心を癒やし
てくれる慰安の場所。私たちにとつて砂漠の地
となるかもしれない社会でのオアシスは、人間
関係ではないでしょうか。辛くなつてしまうの
も人間が関わつていることが多いですが、幸せ
にするのも人間だと思ひます。そして、人間に
とつての最大の贅沢は、人間関係における贅沢
のことだと私はこの本を通して思ひました。私
もこの本の主人公たちのように、贅沢を共有で
きる仲間を見つけていきたいです。

編集後記

学生図書委員長（制御情報工学科四年）

本 田 晶 子

私は、今回の読書感想文コンクールに審査員として参加させて頂きました。

今回の作品はどれもとても読みやすく、題材の本について、読んで感じたこと、考えたことなどがきれいにまとめられているように感じました。私自身は、文章を書くことが苦手で、自分の伝えたいことを文章にまとめる、ということがとても難しいことのように思えて仕方がありません。ですから今回の審査も、みなさんの文章能力に感嘆してばかりでした。

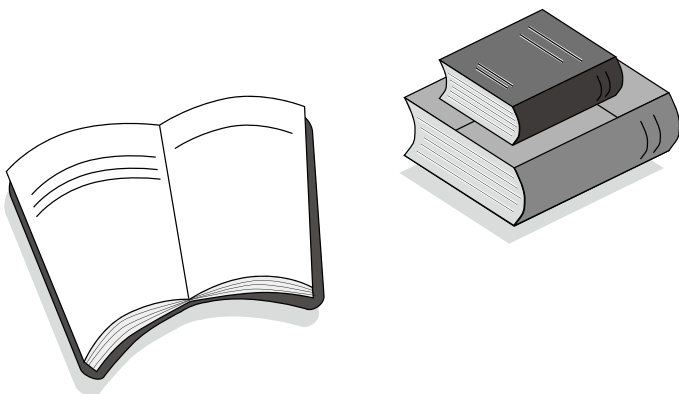
作品の題材となった本の中には、私が読んだことのあるものもいくつかあり、自分が抱いた感想との共通点や相違点を見つけながら読ませて頂きました。また、読んだことのない本についても、作品に皆さんの思いがたくさん詰まっています、自分も読んでみたい、と強く思いました。

読書といえば先日、課題のレポートを作成する際に、いくつか調べなくてはならないことがありました。いつもはインターネットで調べていたのですが、このときは図書館で参考になり

そうな本を借りてみました。すると知りたかったことだけでなく、そのことに関連した様々なことが順序だつて書かれており、より理解が深まりました。改めて本を読むことで得られるものの多さを実感しました。

本を読むことで新しい知識や、新しい考え方に会えます。また、それらを伝えるための表現力も自然と身に付いていきます。そういった力はこれから社会に出て、とても役に立つでしょうし、よりいっそう人生も豊かになります。皆さんもぜひたくさんの本を読んで、たくさんものを得てください。

最後になりましたが、今回の読書感想文コンクールの開催にあたってご尽力を尽くして下さいました先生、関係者の方々、学生の皆様、本当にありがとうございます。このコンクールが、一人でも多くの方が本に触れるきっかけになることを願い、編集後記とさせて頂きます。



「もさく」 第三十九号

発行日 平成二十四年一月二十五日

発行者 大分県大分市牧一六六番地

大分工業高等学校

学生図書委員会

図書館運営委員会

印刷所 丸徳印刷株式会社

住所 大分市新貝四番五〇号

電話 〇九七―五五八―七七三七